

# 八島

世阿弥作

前

ワキ 都の僧

シテ 漁翁

ツレ 漁夫

後

ワキ 前に同じ

シテ 源義経

地は 讃岐

季は 春

「月も南の海原や。く。八島の浦を尋ねん。

「是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ四国を見ず候ふほどに。此度思ひたち西国行脚とこゝろざし候。

「春霞。浮き立つ浪の沖つ舟。く。入日の雲も影そひて。其方の空と行くほどに。はるぐなりし舟路へて。八島の浦に着きにけり。く。

「急ぎ候ふほどに。是は早讃岐の国八島の浦に着き

て候。日の暮れて候へば。是なる塩屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候。

「おもしろや月海上に浮んでは波濤夜火に似たり。

「漁翁夜西岸にそうて宿す。

「あかつき湘水を汲んで楚竹を焚くも。今に知られて蘆火の陰。ほの見えそむる物すごさよ。

「月の出汐の沖つ波。

「霞の小舟漕がれ来て。

シテ「海士の呼声。」

二人「里ちかし。」

シテサシ「一葉万里の舟の道。唯一帆の風に任す。」

ツレ「ゆふべの空の雲の浪。」

二人「月のゆくへに立ち消えて。霞にうかぶ松原の。影は緑にうつろひて。海岸そことも知らぬ火の。筑紫の海にやつぐらん。」

下歌「こゝは八島の浦づたひ。海士の家居もかずくに。」

上歌

「釣のいとまも波のうへ。く。かすみわたりて沖ゆくや。海士の小船のほのぐと。見えて残る夕ぐれ。浦風までものどかなる。春や心をさそふらん。く。」

シテ詞

「まづく塩屋に帰り休まうずるにて候。」

ワキ詞

「塩屋の主のかへりて候。立ちこえ宿を借らばやと思ひ候。いかに是なる塩屋の内へ案内申し候。」

ツレ詞

「誰にて渡り候ふぞ。」

ワキ詞 「諸国一見の僧にて候。一夜の宿を御かし候へ。

ツレ 「暫く御待ち候へ。主に其由申し候ふべし。いかに申し候。諸国一見の御僧の。一夜の御宿とおほせ候。

シテ詞 「やすきほどの御事なれども。あまりに見ぐるしく候ふほどに。御宿は叶ふまじき由申し候へ。

ツレ 「御宿の事を申して候へば。あまりに見ぐるしく候ふほどに。叶ふまじき由おほせ候。

ワキ 「いや／＼見ぐるしきは苦しからず候。殊に是は都

方の者にて。此浦はじめて一見の事にて候ふが。日の暮れて候へば。ひらに一夜とかさねて御申し候へ。

ツレ 「心得申し候。唯今の由申して候へば。旅人は都の人にて御入り候ふが。日のくれて候へば。平に一夜と重ねて仰せ候。

シテ 「何旅人は都の人と申すか。

ツレ 「さん候。

シテ「げに痛はしき御事かな。さらば御宿を貸し申さん。

ツレ「もとより住みかも蘆の屋の。

シテ「たゞ草枕とおぼしめせ。

ツレ「しかも今宵は照りもせず。

シテ「曇りもはてぬ春の夜の。

二人「朧月夜に。若く物もなき海士の苦。

地「八島に立てる高松の。苔の莖は痛はしや。さて慰

みは浦の名の。く。群れるる田鶴を御らんぜよ。

などか雲井に帰らざらん。旅人の故郷も。都と聞けばなつかしや。われらも元はとて。やがて涙にむせびけり。く。

ワキ詞「いかに申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へども。いにしへ此所は。源平の合戦の街と承りて候。よもすがら語つて御聞かせ候へ。

シテ詞「やすき間の事かたつて聞かせ申し候ふべし。いで

其頃は元暦元年三月十八日の事なりしに。平家は海のおもて一町ばかりに舟を浮べ。源氏は此汀に打ち出で給ふ。大將軍の御出立には。赤地の錦の直垂に。紫裾濃の御着背長。鎧ふんばり鞍笠につゝ立ちあがり。一院の御使。源氏の大將檢非違使五位の尉。源の義経と。名のり給ひし御骨がら。あつぱれ大將やと見えし。今のやうに思ひ出でられて候。

ツレ「其時平家の方よりも。言葉戦こと終り。兵船一艘漕ぎよせて。波打際に下り立つて。陸の敵を待ちかけしに。

シテ詞「源氏の方にもつゞく兵五十騎ばかり。中にも三保の谷の四郎と名のつて。真先かけて見えし所に。

ツレ「平家の方にも悪七兵衛景清と名のり。三保の谷を目懸け戦ひしに。

シテ詞「彼三保の谷は其時に。太刀打ち折つて力なく。す

こし汀に引き退きしに。

ツレ 「景清追つかけ三保の谷が。

シテ詞 「着たる兜の鍔をつかんで。

ツレ 「うしろへ引けば三保の谷も。

シテ 「身を遁れんと前へ引く。

ツレ 「互にえいやと。

シテ 「引く力に。

地 「鉢附の板より引きちぎつて。 左右へくわつとぞ退

きにける。 是を御覧じて判官。 御馬を汀に打ちよ  
せ給へば。 佐藤継信。 能登殿の矢先にかゝつて。

馬より下にどうと落つれば。 舟には菊王も討たれ  
ければ。 共にあはれと思しけるか。 舟は沖へ陸は  
陣に。 相引に引く汐の。 あとは鬨の声たえて。 磯  
の浪松風ばかりの。 音さびしくぞなりにける。

ロンギ地 「ふしぎなりとよ海士人の。 あまり委しき物語。 其  
名を名のり給へや。

シテ「我名を何と夕浪の。引くや夜汐も朝倉や。木の丸  
殿にあらばこそ。名のりをしても行かまし。

地「げにや言葉を聞くからに。其名ゆかしき老人の。

シテ「昔を語る小忌衣。

地「頃しも今は。

シテ「春の夜の。

地「潮の落つる暁ならば。修羅の時になるべし。其時  
は我名や名のらん。たとひ名のらずとも名のると

も。義経の浮世の。夢ばし覚まし給ふなよ。く。

(中入)

ワキ詞「ふしぎや今の老人の。其名をたづねし答にも。義  
経の世の夢心。さまざまで待てと聞えつる。

歌「声も更け行く浦風の。く。松が根枕そばだてゝ。  
思ひをのぶる苔筵。かさねて夢を待ちるたり。  
く。

後ジテ「落花枝にかへらず。破鏡ふたゝび照らさず。然れ



どもなほ妄執の瞋恚とて。鬼神魂魄の境界にかへり。我と此身を苦しめて。修羅の街によりくる波の。浅からざりし業因かな。

ワキ「ふしぎやな早暁にもなるやらんと。思ふ寢覚の枕より。甲冑を帯し見え給ふは。もし判官にてましますか。

シテ詞「我義経の幽霊なるが。瞋恚に引かるゝ妄執にて。猶西海の浪にたゞよひ。生死の海に沈淪せり。

ワキ「おろかな心からこそ生死の。海とも見ゆれ真如の月の。

シテ「春の夜なれど曇りなき。心も澄める今宵の空。

ワキ「昔を今に思ひいづる。

シテ「舟と陸との合戦の道。

ワキ「所からとて。

シテ「忘れえぬ。

地「武士の。八島に入るや櫓弓の。く。もとの身な

がら又こゝに。弓箭の道は迷はぬに。迷ひけるぞ  
や生死の。海山を離れやらで。帰る八島の恨めし  
や。とにかくに執心の。残りの海の深き世に。夢  
物語申すなり。く。

地クリ

「忘れぬものを閻浮の故郷に。去つて久しき年波の。  
夜の夢路に通ひきて。修羅道の有様あらはすなり。

シテサシ

「思ひぞいづる昔の春。

地

「月も今宵にさえかへり。本の渚はこゝなれや。源

平たがひに矢先をそろへ。舟を組み駒をならべて。

打ち入れく足なみに。くつばみを浸して攻め戦

ふ。

シテ詞

「其時何とかしたりけん。判官弓を取り落し。浪  
にゆられて流れしに。

地

「其をりしもは引く汐にて。遙に遠く流れゆくを。

シテ詞

「敵に弓を取られど。駒を浪間におよがせて。敵  
船ちかくなりし程に。

地

「敵は是を見しよりも。船をよせ熊手にかけて。既にあやふく見え給ひしに。

シテ詞

「されども熊手を切りはらひ。終に弓を取り返し。もとの渚に打ちあがれば。

地

「其時兼房申すやう。くちをしの御振舞やな。渡辺にて景時が申しゝも。是にてこそ候へ。たとひ千金を延べたる御弓なりとも。御命には換へ給ふべきかと。涙を流し申しければ。判官これを聞し

めし。いやとよ弓を惜しむにあらず。

クセ

「義経源平に。弓矢を取つて私なし。然れども。佳名は未だ半ならず。されば此弓を。敵に取られ義経は。小兵なりといはれんは。無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは。力なし義経が。運の極めと思ふべし。さらずは敵に渡さじとて。浪に引かるゝ弓取の。名は末代にあらずやと。語り給へば兼房。さて其外の人までも。皆感涙をな

がしけり。

シテ「智者は惑はず。

地「勇者は恐れずの。やたけごゝろの梓弓。敵には取り伝へどと。惜しむは名のため。惜しまぬは一命なれば。身を捨てゝこそ後記にも。佳名を留むべき。弓筆の跡なるべけれ。

シテ「又修羅道の関の声。

地「矢叫びの音震動せり。

シテ詞

「今日の修羅の敵は誰ぞ。なに能登の守教経とや。あらものくしや手なみは知りぬ。思ひぞいづる壇の浦の。

地「其船軍今は早。く。閻浮にかへる生死の。海山

一同に震動して。舟よりは関の声。

シテ「陸には波の楯。

地「月に白むは。

シテ「剣の光。

地 「潮にうつるは。

シテ 「兜の星の影。

地 「水や空。空ゆくもまた雲の波の。打ち合ひ刺し違  
ふる。船軍の掛引。浮き沈むとせし程に。春の夜  
の浪より明けて。敵と見えしは群れるる鷗。関の  
声と聞えしは。浦風なりけり高松の。浦風なりけ  
り高松の。朝嵐とぞなりにける。